イネ白葉枯病（病原菌：*Xanthomonas campestris* pv. *oryzae*）

○　被害と発生生態

本病は細菌による病害である。

葉では、波形の白色病斑が葉縁に沿って基部方向に伸長していく（図１）。

被害葉を横に切断して基部側を水に入れると、本細菌が白く糸状に噴出することで容易に診断できる。

病原菌は、サヤヌカグサなどの一部の雑草の根圏土壌および地下茎で越冬する。サヤヌカグサの地上部が生育し始めると葉に病斑を形成し、そこで増殖した病原菌は灌漑水などとともに水田に流入しイネに侵入する。

病原菌は、葉の傷や葉縁にある水孔から侵入する。特に台風などの強雨風で葉が擦れて傷ができると、そこから病原菌が侵入し、本病が急速に蔓延することがある（図２）。

葉が侵されることにより、稔実が阻害され、減収する。

本病に対するイネの抵抗性はかなり明瞭である。なお、山口県では本病に弱い品種の栽培面積が多いので、集中豪雨の発生後に、本病が突発的に発生することがある。

○　防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

・本病に強い品種を栽培する。山口県稲奨励品種の抵抗性の程度は、「日本晴」は強、「コシヒカリ」と「晴るる」は中程度、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」、「中生新千本」、「ヒノヒカリ」、「恋の予感」はやや弱～弱である。

・窒素過多にならないよう適正に施肥をする。

・浸冠水を防止する。

・常発地では畦畔水路等のサヤヌカグサを除去する。

（イ）薬剤防除

・常発地では箱施用剤と水面施用剤を施用する。

図１　葉の病徴

図２　本病が蔓延した状況